

何をもってディストピアとするのか
—ディストピア作品を用いたディストピア要素の分析—

群馬大学 社会情報学部 情報社会科学科
新田 将久

2010年1月15日提出

目次

はじめに.....	2
1 章.....	
ディストピア誕生、ディストピアとは.....	3
1-1 ユートピア思想史について.....	3
1-2 ディストピアの研究状況.....	6
1-2-1 ディストピアとは.....	6
1-2-2 ディストピアとディストピア作品.....	7
1-2-3 ディストピアの研究状況.....	7
2 章.....	
作品分析.....	9
2-1 作品について.....	9
(1) 『1984年』.....	9
(2) 『すばらしい新世界』.....	13
(3) 『われら』.....	17
(4) 『蠅の王』.....	20
3 章.....	
ディストピア要素.....	25
3-1 ディストピア要素の提示.....	25
3-2 ディストピア要素分析.....	26
3-2-1 「管理」について.....	26
3-2-2 合理化について.....	26
3-2-3 権力について.....	28
3-2-4 性について.....	30
おわりに.....	33

はじめに

本論文執筆の動機は大学講義の際に取り上げられたディストピア作品に興味をもったことである。その作品はジョージ・オーウェル『1984年』(1949)である。同作品は現代社会における政府による個人情報の一元化の問題、監視カメラによる国民の監視化の問題などを考えるにあたり、講義で扱われた。しかし、私は同作品から、更に考えるところがあった。どの要素がこの作品をディストピアと感じさせるのか、どの部分が恐怖や拒絶を感じさせるのか、ということである。

例えば1516年に書かれた『ユートピア』において描かれる社会、トマス・モアは誰もが平等に暮らせる世界としてユートピアを描いた。ユートピアと呼ばれる架空の国では、市民の住む家に鍵はなく、家の内には私有のもの、個人のものといったものは存在しない。家そのものについても十年ごとに抽選によって取り換えられる。市民は自分の都市の管轄区域内から出ることには許されず、あらゆるものが白日の下、衆人監視の下に行われるのである¹。当時の理想郷として描かれた平等な社会は、現在から見た時に果たして理想郷と呼べるのだろうか。ディストピアと感じさせる要素とは何であるのか、その答えを探ることが本論文の目的である。

本論文の内容においては、第一にディストピア作品に対する興味から出発し、ディストピア作品誕生につながるユートピア思想史を概観する。その後、ディストピア概念誕生の背景、研究状況について言及する。そして第二に、代表的と見なされているディストピア作品を研究する。さらに第三に、作品分析を通してディストピア作品に描かれる社会や体制をディストピアだと感じさせる要素を提示し、分析を行う。

¹ トマス・モア『ユートピア』、平井正穂訳、岩波文庫、1957年、1516年、pp. 77、99。

1章 ディストピア誕生、ディストピアとは

1-1 ユートピア思想史について

ディストピア概念の根源はユートピア概念の発展の過程で生まれてきた。この節においては川端香男里『ユートピアの幻想』を参考に、ディストピア作品登場につながるユートピアの思想史について概観する²。

マンハイムによれば、ユートピアという概念が歴史的に現れたことにより、世界全体が新しい意味でテーマになったという。世界をはじめて世界にするような意味関係が、この言葉を媒介としてある新しい取り扱い方でわれわれを迎えたとするのである³。これは、ユートピアという概念の登場により、世界や国家、政治といった、巨視的な視点で自らの住む現実を捉えようとし始めたということである。各個人が作り上げる総体としての世界が考えられるようになったのである。

ユートピア思想とは、現実ではない「反現実」を通して「より良き現実」をめざすものであるという。それはミツキュエリによれば、たとえ否定的にせよ必然的に「歴史的現実にとりつかれる」ことであり、マンフォードに言わせれば「改造・再建のユートピア」、つまり自分の生きている社会の条件を分析し、それをもとにして利用できるあらゆる知識をもって理想に近い社会を組織し構築することを指す⁴。

川端によれば、ユートピアの表現方法は大きく二つに分けることができる。ひとつは社会計画の形であり、ひとつは文学の形である。社会計画とは、全体的な幸福を保障する理想の社会・最善の社会・もっとも望ましい社会の建設についての計画案である。代表的なものとしてプラトンの『国家』を挙げることができ、産業の組織化について論じたサン・シモンの『組織者』（1820）や産業組織化の集中化を支持した『産業者の政治的教訓問答』（1832）、フーリエの『家庭的農業協同組合論』（『普遍統一の理論』（1822）も社会計画といえる。他方で文学とは、ユートピア思想を芸術的な形やフィクションという形で効果的に人々にアピールし、提示するものである。文学的なユートピアの手法として、モアやベイコンはまだ発見されていない遠くの世界に理想郷を置き、ベラミーは未来に理想郷をおいた⁵。ディストピア作品について前者の形のものを発見することは難しい。前者は、未来学へつながると考えられる⁶。後者の発展の過程にディストピア作品

² 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 51-89、101-106、110-222。

³ マンハイム『イデオロギーとユートピア』、鈴木二郎訳、未来社、1968年、1929年、p. 19。

⁴ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、p. 20。

⁵ 同上、pp. 48-50、151、159。

⁶ 未来学とは、未来をさまざまな角度から研究・推論する学問の総称である。1960年代後半に誕生し、70年代に急速に発展した学問である。時あたかも先進工業諸国では、

は登場することとなる。次に時間軸に沿ってユートピア思想史について概観する。

そもそも理想郷にあこがれ、よりよい世界を想定する行為は、ほとんどあらゆる民族の神話や伝説に描かれている。例えば東洋に昔から伝わる「桃源郷」はユートピア思想の原点とも言うことができる。ユートピア思想の深淵としては、上記のような伝説、プラトンの『国家』などを挙げる⁷。

12世紀の頃には、教会の影響力の増大がユートピア思想に大きく影響を及ぼすようになっていた。ユダヤの終末論的な救済観は古代ローマ帝国時代から脈々と受け継がれてきながら、この救済観が12世紀ごろ、千年王国論としてユートピア思想の一つの形となるのである。さらに、新大陸の発見がユートピア思想に大きな影響を与えた。モアの『ユートピア』（1516）においてもその影響が大きく現れている。そもそも「ユートピア」は、『ユートピア』の著者、トマス・モアの造語である。『ユートピア』は探検家がユートピア島についての見聞を話すという形で進行する。大航海時代における新大陸の発見は、見知らぬ幸福の島という形で、中世の多くのユートピア文学作品の根底に流れている。『ユートピア』の後継作品としてラブレーの『ガルガンチュワ物語』（1534）における「テレームの僧院」のエピソード、カンパネラの『太陽の都』（1602）などを挙げる⁸。さらにこの時代、ユートピアのもう一つの新しい方向性を指し示したのがベーコンの『ニューアトランティス』（1627）である。科学技術という視点が登場し、科学技術の発達がユートピアを実現するという発想がユートピア思想の中に加わったのである。17世紀の後半になると、フランスにおいて多くのユートピア作品が誕生した。ベルジュラックの『月世界旅行記』（1657）・『太陽世界旅行記』（1662）、フォワニーの『見出されたオーストラリア国』（1676）、フェヌロンの『テレマックの冒険』（1699）などである⁸。

18世紀のユートピア小説のさきがけとなったのが、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』（1719）、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（1726）などである。他にもこの時代の作品として、ヴォルテールの『カンディド』や『ミクロメガス』のような哲学的説話にはユートピア的な風刺が見られ、レチフが『奇異なる思想』（1769）を残している。ヴォルテールやレチフが残した作品は、ユートピア思想史と同時に、社会主義思想史に足跡を残している⁹¹⁰。

高度経済成長と技術革新のさなかにあり、狭義には国家的目標の合意形成、より広い意味では人類社会の目標達成のための新しい学問的手法として多くの人々の支持を得た。ヤフー株式会社。Yahoo!百科事典。執筆者：安田寿明。

(<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E6%9CAA%E6%9DA5%E5%AD%A6/>)。2010. 1. 6 取得。

⁷ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 51-60。

⁸ 同上、pp. 81-90、110-128。

⁹ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 128-141。

¹⁰ 『ユートピア』や『太陽の都』から17、18世紀の社会主義諸思想を経て19世紀なかばのそれに至るまで、ある共通点があることは否めない。それは、貧者も富者も存在しない、人間が幸福な、人間の搾取のない新しい社会の創出という目標の同一性である。

産業革命・工業化が進むにつれて、ユートピア思想にも変化が現れた。地理的な発見の時代は過去のものとなり、科学技術の発展こそが「進歩」となったのである。その一方で、初期資本主義の搾取は社会体制に対する反抗へとつながっていった。19世紀に近づくにつれて、資本主義に対する反抗はユートピア思想の中で特に、社会主義思想という形へと結びついてゆく。その結果、19世紀においてユートピア作品を書くことは、一種の政治的行為となったのである。19世紀にはいると、フランス革命の時代に幼少のころを過ごした人物たちの作品が登場する。そのような人物としては、サン・シモンやフーリエ、カベーなどを挙げることができる。特にカベーの『イカリア航海記』（1839）についていえば、この作品は熱狂的な反響を呼び、アメリカにおいて実際にイカリア村が建設された。かつてのユートピア思想は地理上の発見・国民国家の成立・哲学思想をユートピア思想発展の原動力としてきた。しかし19世紀のユートピア思想は、フランス革命の影響・産業の発展・現状打開の社会改革案を発展の原動力とするのである。過去のユートピアが物質的な富を否定し、禁欲的態度に主眼をおいていたのに対して、19世紀のユートピアは人間の幸福が絶えざる物質生産の増加により達成されると信じたのである。しかし、心や肉体や道徳の進歩に主眼をおくような古典的なユートピア思想が完全に消滅した訳ではない。古典的な系譜の作品は19世紀の後半にも、モリスの『ユートピアだより』（1890）などが残されている。

さらに19世紀には、未来小説という形でユートピアが描かれるようになる。リットンの『来るべき人種』（1870）、バトラーの『エレホン』（1872）、ベラミーの『顧みれば』（1880）などが未来小説という形で書かれている。『エレホン』は機械の発達 of 脅威を描くディストピア作品の先駆けであり、『顧みれば』も（当時ユートピア小説として大ベスト・セラーを記録した作品であるが）その内容は産業の国有化・統制・労働の管理などを描く作品であった¹¹。

20世紀に入ると、多くのユートピア作品が未来を描くようになる。未来小説という形態が誕生した経緯には複数の要因を考えることができ、まずはユートピアの空間を想定しうる空白が地図上になくなってしまったという点を挙げることができる。そして、科学の発展がより加速し、現実味を帯びてくると、「進歩」という発想は以前にも増して大きく影響するようになったと考えることができる。進歩を信じて疑わない科学的な楽観主義は、相反する二つの道へと派生した。片方は一種のユートピア思想であるサイエンス・フィクションへとつながる道であり、科学の進歩によってバラ色の未来を想定する。しかし片方はディストピア思想へとつながる道であり、技術の暴走・技術による暗黒世界を想定する。

「SFの父」とも評されるウェルズは、両方のタイプの作品を世に残した。前者に属するのは『モダン・ユートピア』（1905）や『神のごとき人々』（1923）であり、後者に属するのは『タイムマシン』（1896）や『月世界最初の人間』（1901）などであ

ヤフー株式会社 . Yahoo! 百科事典 . 執筆者 : 古賀英三 .
(<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E7%A9%BA%E6%83%B3%E7%9A%84%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E4%B8%BB%E7%BE%A9/>). 2010. 01. 06 取得.

¹¹ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 142-185。

る。さらに後者には、現在ディストピア作品として認識されている多くの作品が分類されている。フォスターの『機械がとまる』（1909）、ザミャーチンの『われら』（1920）、ハックスリーの『すばらしい新世界』（1932）や『猿とエッセンス』（1948）、オーウェルの『動物農場』（1945）や『1984年』などである¹²。

以上のように、20世紀までのユートピア思想史を概観してきた。20世紀においては、数多くのディストピア小説が生み出されてきた。ソ連の成立、そして見えてきた管理する側の問題（粛清）や、管理される側の問題（サボタージュ）などは、思想家や作家に新たな問題を提起した。『すばらしい新世界』においてハックスリーが引用したロシアの哲学者ベルジャーエフの言葉「ユートピアの確実なる実現をいかにして避けるべきか」は、その危機感を如実に表している¹³。

このように、ディストピア思想は、ユートピア思想の延長線上に、その一変種として位置づけられるのが一般的である。次節では、ディストピアについて、これまでの捉えられ方とその研究状況について指摘する。

1-2 ディストピアの研究状況

この節においては、本論文で考える「ディストピア」という言葉の確認と、現時点においてディストピアがどのように研究されているのかという確認を行う。

1-2-1 ディストピアとは

まず、言葉についての確認である。「ディストピア」は、他にも反ユートピア、アンチ・ユートピアなどと呼称される。前節で追ってきたとおり、ディストピアとは、ユートピア思想史上に現れた概念である。大辞泉によれば、ユートピアとは「空想された理想的な社会。理想郷。理想の国」であり、ディストピアとは「反理想郷。暗黒世界。また、そのような世界を描いた作品」とされている¹⁴。

1-2-2 ディストピアとディストピア作品

次に、ディストピアとディストピア作品についても確認しておく必要がある。ディスト

¹² 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 186-222。

¹³ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、p. 6。

¹⁴ ヤフー株式会社。大辞泉 増補・新装版（デジタル大辞泉）。監修：松村明。
(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E3%83%A6%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%94%E3%82%A2&stype=0&dtype=0>)。
(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%88%E3%83%94%E3%82%A2&stype=0&dtype=0>)。2010. 01. 06 取得。

ピアとは、概念それ自体のことを指す。それに対してディストピア作品とは、作品の中に描かれる社会や体制に、ディストピアであると感じさせる要素を持つ作品のことを指す。本論文においては、上記のような認識のもとに、論を進めてゆく。

1-2-3 ディストピアの研究状況

ディストピアという対象について、ディストピアを描いた個々の作品に関する研究は存在する。しかし、ディストピアという概念自体について深く追求する研究を見つけるのは難しい。川端はディストピアについて

ユートピアは現状に対する不満から出発し、現実の不合理を批判するためにより合理的な対照物を提示するが、アンチ・ユートピアは現実を論理的に処理するという形をとりつつ、その論理を無意味でグロテスクな結論にまで押し進める¹⁵。

と論じ、あるいは、ユートピアとディストピアを特集した朝日新聞社の分冊百科『世界の文学72号』には、ディストピアについて次のように書かれている¹⁶。

ユートピアは全体主義の脅威を露わにし、アンチ・ユートピア小説を生んだ。20世紀のアンチ・ユートピア小説は、ユートピア小説とアンチ・ユートピア小説の伝統の上に生まれたのである¹⁷。

川端の説明は、おそらくユートピア作品、ディストピア作品に対する説明である。そうであると考えても、ユートピア作品誕生の経緯は理解ができるが、ディストピア作品に対する説明、現実を論理的に処理する、という際の「処理」という表現が何を表しているのかというのは、明確には示されていない。そして、『世界の文学72号』における説明においても、ディストピアと感じさせる要素についての説明はなされていないのである。

何を持ってディストピアとしているのか。その部分の議論が抜け落ちているように感じる。特に、日本において研究文献を探そうとした場合、この疑問に答えてくれる文献を見つけるのは難しい。マンハイムによれば、ユートピアとは根本的な現象を明らかにしようとする試みであるという。特に自由主義的・人道主義的なユートピアについて言えば、現存秩序との闘いを通して現れたと論じている¹⁸。ユートピアは現存秩序との闘いを通して

¹⁵ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、p. 220。

¹⁶ 『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、pp. 34-35。

¹⁷ ユートピア小説とアンチ・ユートピア小説の伝統とは、19世紀末から20世紀はじめにかけて起こった、さまざまなユートピア文学の間の論争、そしてユートピア的思考とアンチ・ユートピア的思考の論争のことを指す。『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、p. 34。

¹⁸ マンハイム『イデオロギーとユートピア』、鈴木二郎訳、未来社、1968年、1929年、pp. 202-207。

現れた。ディストピアも同じではないか。ユートピアの対極として一般的に認識がなされているディストピアであるが、ユートピアと同様に、現存秩序に対する闘いとして認識することができ、ディストピア作品を読み解くことができるのではないか。

私は、ディストピア作品の分析を通して、作品に描きだされた社会や体制をディストピアと感じさせる要素（以下、ディストピア要素）の提示を目指す。

2章においては、ディストピア作品4作品について分析を加える。さらに、3章においてディストピア要素について分析を加える。

2章 作品分析

2-1 作品について

この章では、ディストピア作品個々の分析を通して、ディストピアだと感じさせる要素の提示を目指す。分析には、一般的にディストピア作品と認識されている作品を中心に、『1984年』、『すばらしい新世界』、『われら』、『蠅の王』（1954）の4作品を用いた。

「一般的に」とは、先にも述べたとおりディストピア概念に関する研究が少なく、ディストピア作品の判断の根拠を求めるのが困難な現状であるが、その中でも代表的・典型的なディストピア作品との評価を受けている作品を用いた¹⁹。さらに、ディストピア作品の中でも、幅を持たせる意味も込めて、他の3作品とは切り口の異なる『蠅の王』を分析の対象とした²⁰。

概要、あらすじ、さらに作品の特徴を示し、分析を加える。

(1) 『1984年』

ジョージ・オーウェルによって1948年に書かれた作品である。ジョージ・オーウェルは1903年にインドで生まれた。インドの麻薬管理官の父は、いわゆる上層中産階級であり、オーウェルは奨学金によるエリートコースを歩んだ²¹。

オーウェルの作品は過去の体験を基調にした、想像力に乏しい作品といわれることがある。というのも、オーウェルの作品すべてに共通して、彼の実体験が大きく影響を与えているからである。オーウェルは父親の強い要望により大学への進学をあきらめ、インドの帝国警察に就職し、5年間ビルマで勤務した。彼がビルマでみたものは、原住民を監獄に放り込み、むやみに絞首刑に処する圧政の体制であったという²²。この経験が、いわゆる「オーウェル的世界」の基になっており、この発想は彼の作品すべてに見て取れるのである。その後の放浪生活を経てオーウェルは作家となる。

概要

オーウェルの人生最後の作品となるのが『1984年』である。『1984年』は、集中

¹⁹ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、pp. 211-214、216-218。

『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、pp. 38-39、44-45、52-53。

²⁰ 株式会社 日経新聞デジタルメディア。日経ワガマガ。Newsweek が選んだ人類至高の百冊。

(<http://waga.nikkei.co.jp/enjoy/book.aspx?i=MMWAe1000008072009&page=2>)。

2010. 1. 6 取得。

²¹ 「解説」新庄哲夫、『1984年』ジョージ・オーウェル著所収、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、p. 411。

²² 同上、pp. 411-413。

的な管理体制の生み出す恐怖と、権力への恐怖を描いてみせた。『1984年』は架空の国家オセアニアを舞台とし、国家を指導する「ビッグ・ブラザー」および国家を運営する党に対して不信感をもつ党外局員、ウィンストンを主人公とするディストピア小説である。

あらすじ

ウィンストンは真理省の情報局に勤める党外局員である。日々の生活は貧しいものであり、その生活は常にテレスクリーンにより監視されている。情報局において過去の改変という仕事に従事するウィンストンは、党に不信感をもっていた。1984年4月4日、ウィンストンは日記をつけ始める。日記をつけるという行為は思想警察に知れば死刑となる行為であり、ウィンストンによる党への反抗であった。

そんな中ウィンストンはある意味において同じく党へ反抗する女性、ジュリアと出会う。二人は党の監視網を掻い潜って密会を重ね、親密な関係へととなっていく。その後ウィンストンは、かねてより自らと同じ思いを持っているのではないかと考えていた党内局員オブライエンと接触をする。オブライエンはウィンストンに、自分が国家の反逆者であり、人民の敵であるゴールドスタインにより組織された「兄弟同盟」の一員であることを教えた。そして、ウィンストンとジュリアは「兄弟同盟」の一員となる。ウィンストンは「兄弟同盟」から、ゴールドスタインにより書かれた「少数独裁制集産主義の理論と実際」という本を受け取った。この本によって、ウィンストンは党に対する拒絶と自分の考えの正しさに対する自信をより強固なものとする。しかし「兄弟同盟」となって長く経たないある日、ジュリアと密会をしていた時にウィンストンは彼女ともども思想警察に捕まり、愛情省へと連れていかれるのである。

愛情省にはオブライエンの姿があった。彼は異端者を演じていたのであり、ウィンストンのまわりには思想警察が常に存在していたのであった。愛情省においてウィンストンは、党の全てを知ることになる。ウィンストンは党が権力を求める理由について、党は大多数のためにしかたなく行っていると弁解すると考えていた。民衆はか弱く、自由には耐えられない。そのため党は弱者の保護者となり、善をもたらすために悪を行う献身的な一派であると言うに決まっていると考えていた。しかしオブライエンの答えは全く別のものであった。党はただ権力のために権力を求めているのであった。権力の追求のみが党の目的であり、この社会は権力への陶酔をより増大し、絶えず鋭敏にするための社会であるとオブライエンは説明したのである。あらゆる瞬間において勝利のスリルと、抵抗力を失った敵を踏みつけにする快感のみが求められる。そのために戦争と（ウィンストンのような）社会の敵が必要であり、それらは永久になくなることはない。党によって異端者は常に確保されるのである。党にとって大事なのは愚かしい犯罪行為ではなく思想だけであり、異端者を心の底から改造し、進んで党にひれ伏すようにすることこそが重要なのである。その時にこそ権力の感覚は鍛えられる。勝利につぐ勝利、凱歌につぐ凱歌こそが党の求めるものであると説明したのである。

愛情省から帰ってきたウィンストンは大きく変わっていた。40年間かかって「ビッグ・ブラザー」の微笑の意味を理解したのである。ウィンストンは自分がみじめで不必要な誤

解をしていたことを理解し、愛情豊かな心に背いたことを心の底から悔いていた。ウィンストンはやっと自分に対して勝利を納めたのである。彼は、「ビック・ブラザー」を愛していた。

『1984年』に描かれる政治体制

『1984年』に描かれるオセアニアの国家体制は、基本的には社会主義・全体主義的であるといえる。全人口の85%のプロレタリア階級（プロレ）、2%の党内局員、それ以外の党外局員により構成されている。政府の機構は大きく4つの官庁に分割されており、報道・娯楽・教育・美術は真理省、戦争は平和省、法と秩序は愛情省、経済問題は豊富省によって統括されている²³。党外局員の生活は貧しい。生活必需品は配給制であり、例えば「衣料配給切符は年間3千点であり、パジャマは一着6百点もする」という記述がある²⁴。それに比べて党内局員の生活は豊かである。上等な食べ物や高級煙草、さらにワインなど、党外局員は見たこともないようなさまざまな物を所有している。しかし、党内局員の生活でさえも20世紀初頭の基準からすれば簡素で苦勞の多い生活であると記述されている²⁵。

オセアニアはイングソック（英国社会主義）を基盤とする国家であり、新語法・過去の変容性・二重思考を国家の諸原則とする。党関係者においては言論・思想・私的な欲求による性交渉などは厳しく制限されており、党員の生活圏内のいたるところにテレスクリーンとよばれる装置が設置してある。テレスクリーンとは、送信・受信を同時に行うことの出来る装置であり、自分の意思で電源を切ることはいできない。常に党員を監視・盗聴すると同時に、政治・戦争に対するプロパガンダ映像・情報を常に発信している。法律は存在せず、党の方針にそぐわない行為はすべて違法行為とされている。党員に対する厳しい統制の反面、人口の大部分を占めるプロレに対してはほとんど介入をしない。プロレに対してはテレスクリーンによる監視や、思想警察による管理などはほとんど行われず、党はプロレを動物のように無力な存在であると認識している。党は三スローガンとして、戦争は平和である、自由は屈従である、無知は力である、を掲げている²⁶。

次に、『1984年』における特徴を個々に紹介をしていく。

新語法

新語法はオセアニアの公用語であり、イングソックのイデオロギー的な要求に応えるべく考案された言語である。その目的は、イングソックの固有な世界観や精神的習慣の表現方法を与え、イングソック以外のあらゆる思考方法を不可能にするということである。思想は文字に依存するものであり、イングソックから逸脱する思想を言語活動として成立さ

²³ ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、p. 11。

²⁴ 同上、p. 43。

²⁵ 同上、p. 250。

²⁶ ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、pp. 9-10、90。

せないために、語彙の削減によって思考の範囲を縮小させる意図をもっている²⁷。

過去の可変性

イングソックにおいて過去とは現在に合わせて常に修正・改変されるものである。党は「過去を支配する者は未来まで支配する。現在を支配するものは過去まで支配する」と謳っている。ウィンストンは作中において、人々が党の強いる虚構を受け入れ、あらゆる記録が同じような虚構を述べるなら、その虚構は真実となってしまうと発言している。さらに、党はあらゆる記録を管理し党員も党の記録に合わせて記憶を管理しており、それはすなわち過去の管理であると記述されている。現実とは人間の頭の中にだけ存在するものであって、集団主義体制の下、不滅である党の精神の内部にしか存在し得ず、党が真実だと主張するものは何であれ真実であり、党の目を通じて見る以外は現実を見ることはできないとしている²⁸。

二重思考

二重思考とは、過去の可変性を可能にするために絶対不可欠なものである。完全な真実を意識していながら注意深く組み立てられた虚構を口にするのである。相殺し合う意見を同時に持ち、それらが矛盾し合うのを承知しながら双方ともに信奉することであり、忘れ去る必要のあることはすべて忘れ、必要とあらば再び思い出すことである。党員には謙譲と自己鍛錬による記憶の管理が求められ、訓練された精神の持ち主だけが現実を認識することができるかとされている²⁹。

性に対する統制

党員の私的欲求による性交渉は、厳しく制限されている。党の目的は統制が及ばない忠誠関係が男女間に樹立させるのを防ぐためであり、性行為からあらゆる快感を取り除くためである。さらに、性に対する統制・抑圧の重要な点が、党員を一種のヒステリー状態においておくということである。性的欲求に対するフラストレーションは他国への憎悪・恐怖へと変換され、戦争熱と指導者の個人崇拜に転化されうる望ましい状態だと考えられている³⁰。党員間のあらゆる結婚は委員会の承認を必要とし、当事者がお互いに肉体的に引きつけられているという印象を与えたら許可がおりることはない。唯一の公認された結婚目的は党に奉仕するために子供を生むということである。性交渉は不愉快で取るに足らない一操作と見なさなければならず、幼児期から全党員の頭に叩き込まれる。青年反セックス連盟といった組織もあり、両性の完全な独身主義を唱道している³¹。

²⁷ 同上、pp. 67-68。

²⁸ 同上、pp. 322-324。

²⁹ 同上、pp. 275-277、323-324。

³⁰ ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、pp. 173-174。

³¹ 同上、pp. 84-85。

戦争

世界にはオセアニア・イースタシア・ユーラシアの三超大国家のみが存在し、三国は恒久的な戦争状態にある。一国と戦争をしている時は他の一国と同盟を結んでいる。同盟間の裏切りによって対戦相手を変えることはあっても、戦争が終結することはない。オセアニアは大西洋と太平洋の海域により、イースタシアは住民の多産性と勤勉により、ユーラシアは広大な陸地により三国家の力が完全に拮抗しているからであり、もはや勝敗をつけるのが不可能な状態にあるからである。三国家とも、国家内において十分な資源を所有し、自給自足が成立している。国家間の人間の移動は各国ともに禁止されている。

特にオセアニアについて言えば、戦争は体制維持において非常に大きな役割を担っている。第一に戦争の意義は、生活水準を引き上げずに工業製品を消費するという点にある。停滞状態の経済状態下においては、土地の耕作や設備資金の増加は行われない。そして人口の大部分は就労できずに国家の恩恵的な政策により飼育殺しの生活状態を強いられる。不必要な窮乏状態は不満となり、反対へとつながる。しかし、戦争によって富を増加させることなく産業の車輪を回転させることができるのである。

さらに戦時下においては、危機にあるという意識が少数の特権階級に全権を委ねることが自然であり、生存の不可避的な条件であるという状況を生み出す。そして、三国の完全なる拮抗状態は科学の発展の必要性を否定する。科学の発展に際しては、過去の経験に学ぶ必要がある。実験・経験の積み重ねが必要であり、その過去を改変することに対しては一定以上の配慮が必要とされる。しかし、科学技術の向上が必要なくなったことにより、イングソックの原則である過去の可変性という点においても、恒久的な戦争は大きな役割を果たしていると言えるのである³²。

党の存在意義

『1984年』に描かれるオセアニアの国家体制は、基本的には社会主義・全体主義的であるといえる。しかし作中において、従来の過去のあらゆる少数独裁制とは根本的に違っていると説明されている。党は権力のために存在しており、他人の幸福には関心はない。権力はそれ自体が目的となりうるものであり、権力こそが神であると説明されている³³。

(2) 『すばらしい新世界』

オルダス・ハックスリーによって書かれたディストピア小説である。ハックスリーはイギリスの小説家であり、評論家である。生物学の専門家である祖父と兄を持ち、深い科学的知識が作品により現実味を与えている。ハックスリーは、科学による人間の進歩に否定的な立場をとり、人間精神の根源的な可能性について関心をもっていた。『すばらしい新世界』は、第一次世界大戦が終了し、第二次世界大戦へと至る不穏な世界情勢の中で作られ

³² ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、pp. 244-259。

³³ 同上、p. 344。

た。「遺伝子工学」の発想を用いてディストピアを描いて見せた作品である³⁴。

概要

オルダス・ハックスリーによって書かれた『すばらしい新世界』は、人口受精や科学的技術の発達によって細かく規定・管理された社会を、数人の登場人物の立場で描いた小説である。

あらすじ

フォード紀元632年、世界国家の標語は「共有・均等・安定」。人間は「人工孵化・条件反射育成所」で誕生する。人々には生まれる前から階級が決定されており、その階級は生涯変わることはない。階級により仕事内容が分かれており、下層の階級になればなるほど、その容姿も醜くなるように調整される。家族という概念は存在せず、人々は常に同等か、または近い階級の人間と行動・交流を共にする。激情や不安は社会を乱すものと考えられており、実際にそのような状態に陥ることのないような社会を実現している。

アルファというもっとも優秀な階級に属するバーナード・マルクスは、その階級にもかかわらず、まるでガンマ階級のような背格好をしていた。その事実は彼を社会から疎外された存在であると自身に認識をさせており、その点で彼は他の誰もが感じたことのない「孤独」という感情を知っている数少ない人間であった。そして、彼の友人であるヘルムホルツ・ワトスンもまた、異なった理由から、「孤独」を知る数少ない人間の一人であった。彼はひどく優秀であり、その優秀さ故に他人との違いを意識していた。バーナードはある時、ふとした偶然から観光で訪れた蛮人保存地区で一人の青年と知り合う。彼はバーナードと同じように文明社会から観光にやってきたベータ階級の女性の子供であった。そしてバーナードは、サヴェジ（野蛮人）と呼ばれる青年を文明社会へと連れて帰る。

文明社会において、様々な科学技術や快適な空間に感動したサヴェジであったが、時間が経つにつれて、文明社会に対するさまざまな違和感を感じるようになる。人々は皆親切であり礼儀正しいが、画一的であり、下層の階級の人間ともなれば容姿までもが皆同じである。まさに画一的なのである。文明社会には故郷（蛮人保存地区）における大地の神や家族への思いは存在しない。その代わりに大量生産・大量消費を可能とした、フォーディズムの創始者、ヘンリー・フォードを信仰の対象としている。

サヴェジは高層マンションから逃げ出し、文明社会の片田舎で自給自足の生活を始める。しかし、その情報はたちまち公となる。連日取材のヘリがサヴェジのもとにやってきた。さらに、それに加えて観光客もやってくるようになり、サヴェジはまさしく人気の見世物となった。ある日の朝、一人の男がサヴェジを訪ねると、彼は首を吊っていた。

『すばらしい新世界』における政治体制

『すばらしい新世界』では、科学技術の発展により実現した明確な階級社会が描かれている。世界規模の戦争と、経済の崩壊によって、世界統制が実現されたとされている。世

³⁴ 『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、pp. 44-45。

界国家は10人の総統を頂点として構成されており、明確な階級の区分がある。最も高い階級から、アルファ・ベータ・ガンマ・デルタ・エプシロンと区分されており、各階級の中にもダブルプラス・プラス・マイナスなどの区分がある。人々の階級は生まれる前から決定されており、生涯階級が変わることはない。

世界国家においては「安定」が最も重要とされている。社会の安定なくして文明はなく、個人の安定なくして社会の安定はないとされている。社会は常に各階級の人数が最適であるように管理されており、人間は計画に沿って人工的に誕生する³⁵。

社会は「ボカノフスキー法」と「条件反射訓育」を根底に成立している。「ボカノフスキー法」とは一つの受精卵から双生児を最大で96人作り出す技術で、下層階級の人間はこの方法で大量に生み出される。さらに、下層の階級の胎児ほど、胎児の時期に与える酸素の量を減らし、血液にアルコールを混ぜることによって、皮膚は浅黒く、背の低い人間になると書かれており、容姿の点においても階級間での差別化を図っている³⁶。「条件反射訓育」は、階級に合わせた思想や思考を持つように教育（洗脳）することである。例えば、下層階級の子どもは、物心がつく前からバラや本を見せ、電気ショックを与える。この方法によって頭で考える前に条件反射としてバラや本を嫌悪する下層階級として教育されてゆく。さらに、アルファを含む全ての人間は、至上命令（カテゴリーカル・インペラティブ）の声には逆らうことができないように条件反射訓育を受けている。そして、「睡眠時教育法」により階級としての社会的道徳を植えつけられる。この教育により、各階級の人間は、自身は最も恵まれた階級であり、幸福だと認識するようになる³⁷。

『すばらしい新世界』における生活様式

『すばらしい新世界』の世界国家においては家族や親族という概念は存在しない。男女間における性交渉は楽しい遊戯という位置づけである。個人的・独立的な行動は異端的であり、人々は常に近い階級の人間と行動を共にしている。「万人は万人のものである」と教育される。個人の感情の起伏は避けるべきものであり、そのために我慢や孤独は異端的な振る舞いとされている。「汝が今日持ちうる楽しみは明日に延ばすことなかれ」と教育される。さらに、感情を安定させるソーマという錠剤が全国民に支給される。突発的な不安などの感情の起伏が生じた時や、ふいに生じる快樂の切れ目の際には、人々はソーマを飲む。ソーマは麻薬や酒のように快樂を与えはしても、一切の副作用は存在しない。人々は働く以外は常に快樂から快樂へと渡り歩き、1人で物思いにふけったり、大きな感情の起伏を生じるようなことはなく生活している³⁸。

「睡眠時教育法」により、「つくろうより捨てるほうがましだ」「1針ごとに富が減る」などと教育される。これにより人々は大量に消費し、工業生産高は安定し、経済の車輪が

³⁵ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、pp. 41-42、58-70。

³⁶ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、pp. 10-24。

³⁷ 同上、pp. 26-29、35-36。

³⁸ 同上、pp. 38、53、69、111。

止まることはなくなる。大衆は田園で花を見て余暇を過ごすことを嫌うように教育される一方で、田園のスポーツを愛するよう教育される。田園のスポーツは精巧な機械を大量に使用するよう設計されており、大衆は運輸機関を利用し、工業製品を消費するために田園に赴くのである³⁹。

次に、『すばらしい新世界』における特徴を個々に紹介をしていく。

『すばらしい新世界』における性

『すばらしい新世界』においては、階級にかかわらず子どもたちは「性の遊戯」を、走り回ったりボールで遊ぶのと同じように、一つの遊戯として遊ぶ。性的な快感は楽しい遊戯の一つと考えられている⁴⁰。

両親・親・父・母・家族などの言葉は、いわゆる狼語として認識されている。同様に、人間が以前は壇からではなく母親の体内から「産まれた」という点についても、同様の認識をもって扱われている⁴¹。

さらに、人々は大人になると（その正確な時期についての記述はない）性交渉を親しい友人と過ごす際に行う一行事として認識する。映画に行く、食事をする、デートをするといったような行動と同様の感覚をもって性交渉を行う⁴²。

以上のような性に対する考え方の根拠として、家族・一夫一妻制は排他主義・興味の集中へとつながり、衝動と精力を狭い通路にひたすら流し込むことに他ならないと説明している。抑えられた衝動はたった一つのはげ口に集中することによって猛烈な水圧となり、そのために前近代の人は狂気じみ、意地悪で、不幸だったとしている。強く物を感じることは安定にとっての敵であり、人々はあらゆる快感から快感へと渡り歩くことにより、結果的には物を考えることなく人生を消費してゆくことになる⁴³。

歴史について

『すばらしい新世界』の世界においては、過去抹殺運動が行われた。博物館は閉鎖され、歴史的記念物は爆破され、あらゆる過去の書物は弾圧された⁴⁴。

階級について

『すばらしい新世界』における階級とは、産まれる前から決定されているものであり、一生涯その階級が変わることはない。アルファ・ベータ・ガンマ・デルタ・エプシロンと階級が分かれている。さらに階級内においてもダブルプラス・プラス・マイナスなどの優

³⁹ 同上、pp. 29、60-65。

⁴⁰ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、pp. 38-40。

⁴¹ 同上、p. 30。

⁴² 同上、p. 69。

⁴³ 同上、pp. 48-53。

⁴⁴ 同上、pp. 62-63。

劣が付けられている。人々に職業選択の自由や機会は与えられておらず、階級は社会において自らが従事する役割・労働の種類によって分類されている。例えば、アルファの人間は社会のシステムを担う「人工孵化・条件反射育成所」などの仕事に従事する。それに対してデルタ階級の人間は工場での単純労働などに従事する。階層における人口の構成比は上位の階層になるほど低くなる、ピラミッド状の構造である。アルファの人間が一つの受精卵から一人の人間として産み出されるのに対して、デルタやエプシロンなどの階級の人間は一つの受精卵から「ボカノフスキー法」によって大量に産み出される。知能のレベルも階級ごとに調整されており、下層の階級の人間は胎児の時期に与える酸素の量を調節することによって階級に見合った知能を持つ人間として誕生させられる。実質的に、階級に見合わない優秀・劣等な人間が産まれる可能性はない。さらに、下の階級の人間が上の階級の人間に対して反抗や不満を抱くこともない。それは、「条件反射訓育」「催眠時教育法」によって、産まれる前から決められている、与えられた仕事・階級に対してその状況が最善であると認識するように教育されるためである⁴⁵。

(3) 『われら』

ロシア（ソ連時代）の作家、エヴゲーニー・イワノヴィチ・ザミャーチンによって書かれた小説である。ザミャーチンは造船技師でもあった。1910年代におけるロシア小説の新しい傾向、ネオリアリズムを代表する作家である⁴⁶。

『われら』は、ディストピア小説というジャンルにおいて、先駆的な作品である。『われら』に対してザミャーチンは「この小説は人類をおびやかしている二重の危険、つまり機械の異常に発達した力と国家の異常に発達した力に対する警告である」と述べている。ロシアの政治体制がこのまま進行し、西欧のテクノロジーがそこに加わった時どうなるのかという未来図を描いた作品である⁴⁷。川端は、このままでは必然的にやってきてしまうユートピアの否定的な側面を見事に結晶させた最初の作品としての栄光はザミャーチンに属すると述べている⁴⁸。

『われら』は、反ソ宣伝のもっとも悪質な代表作品とされ、ソ連において陽の目を見ることはなかった⁴⁹。

概要

200年戦争という世界戦争を経て、さらに1000年後という世界を想定し、主人公であるD-503号という男性を主人公とする。未知の星に住まう野蛮人に対して、自分たちの生活について説明する主人公の手記という形をとって作品が進行する。

⁴⁵ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、pp. 10-12、260。

⁴⁶ 『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、p. 51。

⁴⁷ 川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年、p. 212。

⁴⁸ 同上、p. 213。

⁴⁹ 同上、p. 214。

あらすじ

主人公であるD-503号は単一国のナンバー（全員数成員）の一人である。ナンバーは皆、統一された淡青色のユニファを纏い、胸には自らの番号の彫られた金色のバッジをつけている。彼は数学者であり、「インテグラル」の製作担当官である。「インテグラル」とは、おそらくまだ自由という野蛮な状態にとどまっている、他の惑星に住む未知の生物に数学的に正確な幸福をもたらすために建造中の宇宙船である。

ある日D-503号は散歩中にある女性に声をかけられる。彼女はI-330号といい、彼は彼女の中に他のメンバーには感じない理解不能の雰囲気を感じた。(D-503号はこの感覚をXと名付けた)。その後、I-330号について考えるたびにD-503号はXに悩まされた。そしてI-330号は、事あるごとにD-503号を呼び出しては彼を誘惑したり、単一国で禁じられているアルコールを飲んで見せたりするのである。そしていつの間にかD-503号はI-330号を愛してしまっていた。個人的な愛は単一国においては許されない行為である。彼はI-330号に愛を感じ、I-330号と関係を持つ者に嫉妬を感じるようになっていた。彼はI-330号に逆らうことができなくなっていた。

D-503号は、自分は病気であると認識していた。そして、病気によって単一国の規則を破っている自分に罪の意識を感じていた。しかし、しだいにD-503号は病気から治りたくないと考えようになっていった。D-503号は想像力をもってしまったのである。単一国の規律に従って生きていた時には感じる事のなかった愛や嫉妬という感情を、I-330号によって持たされてしまったのである。

ある時、D-503号はI-330号が秘密のエレベーターを使ってどこかへ行くのを知ってしまう。彼女は単一国に対する反乱分子の一員であり、D-503号は「インテグラル」の製作担当官であるがゆえに利用されているに過ぎなかったのである。さらに、反乱分子は緑の壁の外に住む人々ともつながっていた。200年戦争によって緑の壁の外の間人は滅びたという単一国の情報は嘘だったのである。時を同じくして、全ナンバーは想像力摘出手術を受けるようにという命令が単一国から下った。彼はもはや彼女の虜であり、想像力をもってしまった彼は単一国に対しても疑問を持ちはじめていた。かくして、「インテグラル」の試験飛行日に、この宇宙船を乗っ取る計画が実行されることとなるのである。

「インテグラル」の乗っ取り計画は失敗した。計画は単一国のスパイ、「守護者」に知られていた。そして、D-503号は単一国を管理する「恩人」のもとに連れて行かれるのである。しかし、D-503号は恩人のもとから逃げ出した。外に出ると、そこには混乱が広がっていた。反乱分子により緑の壁は破壊され、想像力摘出手術から逃げるナンバー達によって都市には無秩序が広がっていたのである。D-503号はやはりI-330号に利用されていただけであり、そのことを守護者に告白することを決意した。しかし、守護者は最初から全てを知っていたのである。そしてD-503号は想像力摘出手術へと連れていかれた。

想像力摘出手術を受けたD-503号はすっかり元の通りの単一国のナンバーへと戻っていた。自分の犯した過ちについて、自ら恩人のもとへ出頭し、説明した。そして、恩人とともにI-330号や他の反乱分子が拷問される光景を満たされた気持で見ている。彼

は単一国が反乱分子を一掃することを希望していた。そして、理性が勝利することを確信していた。

『われら』における政治体制

『われら』においては単一国という国が舞台となっている。単一国の人口は一千万人であり、都市の周りは緑の壁に囲まれている。200年戦争により都市と都市をつなぐ道路はすべて破壊され、誰もそれを再建しようとは考えなかった。その結果、200年戦争から1000年経った単一国は、都市の周りを緑の密林が生い茂っている。都市のすべての建物は皆恒久的なガラスによって作られており、ナンバーの生活は全て白日の下にさらされている⁵⁰。

単一国は「恩人」によって管理されている。恩人とは、恩恵を施す人であり、罪人に刑を執行する人である。恩人は満場一致デーにおいて選挙で選ばれる。しかし、選挙とは、あらかじめ決まっている恩人を祝う一種の儀式であり、選挙の結果が満場一致になる以外はありえない。そして、ナンバーの生活は「守護者」によって常に監視されている。守護者とは、守護局に勤める局員であり、ナンバーの誰もが守護者によって監視されていることを認識している。さらに、すべての道路には街頭振動膜が隠されており、街頭の会話を盗聴している⁵¹。

規則を破った者や単一国に対して反抗的な者は、裁判祭と呼ばれる日に恩人の手によって処刑される。処刑は、恩人の偉大さを示す儀式として、大勢のナンバーの前で執り行われる⁵²。

『われら』における生活様式

ナンバー達は時間律法表によって生活をする。時間律法には、起床・就寝の時間、出勤・食事の時間、さらには咀嚼の回数までもが細かく定められている。さらに、手紙などは検閲を通さなければ相手に届くことはない。日に2度、16時から17時と21時から22時の間だけは個人時間とされている⁵³。

父・母・子供など、家族的な概念は単一国には存在しない。母性基準と父性基準が存在し、養児業が存在する。子供は児童教育工場において教育される⁵⁴。

次に、『われら』における特徴について個々に紹介していく。

『われら』における性

単一国においてはナンバーすべてが、性的所産としての任意のナンバーに対する権利を

⁵⁰ ザミャーチン『われら』、川端香男里訳、岩波書店、1992年、1920年、pp. 8-9、19。

⁵¹ 同上、pp. 24、74、80-81、207-209。

⁵² 同上、pp. 37、68-74。

⁵³ 同上、pp. 20-21。

⁵⁴ 同上、pp. 23、184。

持っている。特定の愛というものは存在しない。200年戦争より以前、世界を支配していた飢餓と愛はもはや根絶されたとするのである。石油食品の発明により、飢餓はもはや過去のものとなった。200年戦争では地球人口の2割しか生き残ることができなかった。しかし、そのこともまた飢餓の根絶に一役買ったとされている。そして飢餓と同様に、愛もまた過去のものとなったのである。性規制法により、性・愛は組織化され、数学化されたのである。性規制局によりナンバーは血液中の性ホルモンの含有量を綿密な検査により算定される。そしてそれに相応するセックス・デー予定表が作成される。ナンバーは申請書を書いて自分のセックス・デーにはこのナンバーを（ナンバーたちを）利用したいというような申請をして、ピンク・クーポンを受領する。性は羨望ではなく、調和的で快い有益な有機体の機能に形を変えたと説明されている⁵⁵。

時間律法表

ナンバーの行動を細かく規定した行動表であり、時間律法表に従わない行動は違法となる。ナンバーは、時間律法表の指示通りに同一秒にスプーンを口へと運び、同一秒に散歩に出かけ、講堂に行き、眠りにつく⁵⁶。

(4) 『蠅の王』

『蠅の王』は、ウィリアム・ゴールディングによって書かれたディストピア小説である。ゴールディングスは1922年、イングランドで学校教師の子として生まれた。育った家は教会の墓地に隣接しており、少年時代のゴールディングは地下に埋まる死体のイメージに憑かれていたという⁵⁷。

そしてこの作品はバルンタインの『珊瑚島』（1858）やジュール・ベルヌの『15少年漂流記』（1888）といった楽園で少年たちが楽しく冒険をするというユートピア小説のパロディ小説でもある。ユートピア小説に対する風刺という側面を、この作品は持っている⁵⁸。そもそも作品の題名ともなっている「蠅の王」とは、悪魔ベルゼブブのことである⁵⁹。

概要

未来の世界大戦を背景とし、戦争のために疎開するイギリスの少年たちを乗せた飛行機が、無人島に墜落したことによって話がはじまる。楽園のように思えた無人島で起こる出来事を、主人公の視点で描いてゆく。

⁵⁵ ザミャーチン『われら』、川端香男里訳、岩波書店、1992年、1920年、pp. 8-9、34-35。

⁵⁶ 同上、pp. 21-22。

⁵⁷ 「解説」平井正穂、『蠅の王』ウィリアム・ゴールディングス著所収、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、p. 338。

⁵⁸ 同上、pp. 338-340。

⁵⁹ ベルゼブブとは、聖書に出てくる悪魔のことである。同上、p. 337。

あらすじ

世界大戦のためにイギリスから疎開する途中の飛行機が、嵐によって無人島に墜落する。生き残ったのは少年たちだけだった。その島は無人島であったが、温かい気候、きれいな海岸、豊富な果物、まるで楽園のようであった。

活発な少年ラーフは臆病者の太った少年ピギーと出会う。ピギーは臆病者ではあったが、同時に思慮深く、合理的に物事を考える少年であった。ピギーの提案で、二人は他の生存者を捜し始める。その途中、二人は偶然ほら貝を見つける。ピギーはラーフに、ほら貝を吹いてみんなを集め、集会を開くように提案する。ほら貝を吹くと、その音を聞きつけて年齢も服装もバラバラの少年たちが次々と集まってきた。どうやったら救助されるか、今後どうするのか、といったいろいろなことを決めるために隊長を決めることになった。その時、合唱隊のヘッド・ボーイをしていた少年ジャックが、自分が隊長になると言った。しかし、他の少年たちは選挙で隊長を決めようと言いだした。少年たちにとってはすべてがごっこ遊びの延長であった。選挙の結果、隊長にはラーフが選ばれた。

島はうつくしく、少年たちは大人のいない不安よりも、未知の島での冒険に心を躍らせた。救助が来るまでの間の、いろいろな規則を作ることになった。まず、意見を発言する時はほら貝を持つことが決まった。発言をする人がほら貝を持ち、他の人は隊長のラーフを除いて発言の邪魔をしてはならないということが決まった。そして豚を狩るための狩猟隊を作ることになった。しかし、それは救助が来るまでの楽しいごっこ遊びであり、この島は水も食料も豊富であった。ピギーだけが、自分たちの置かれた状況について冷静に考えようとしていた。さらに、近くを通る船に気づいてもらえるように山の上で烽火を上げることが決まった。ピギーは烽火の前に小屋を作る必要があると言っていた。しかし、誰もその話には耳を傾けなかった。烽火の炎が近くの森に燃え移り、少年たちは恐怖にかられた。そして、集会にいた幼い少年の一人が見当たらないことに気付いた。

ラーフとジャックはしばしばぶつかった。ラーフは救助されるための烽火と小屋を最も重要とし、ジャックは豚を捕まえることを最も重要とした。リーダー格の二人の少年の意見が違っていたのである。ある日、島の近くを船が通った。ラーフはこれで助かると思った。しかし、山の烽火は上がっていなかった。急いで山に登り烽火を上げようとした時には、船の姿はもう見えなくなっていた。ジャックと狩猟隊、そして烽火の番の少年たちは狩りに行っていた。烽火の番の少年たちは、ジャックに言われて狩りに連れていかれたのだった。ラーフとジャックの間には亀裂が生まれていた。

ラーフは細かい規則を考え、少年たちに伝えた。しかし、ジャックはラーフに従わなくなりつつあった。自分の指揮で豚を殺したことで、ジャックは自分がリーダーだと思い始めていた。自分に従わない者には、肉を与えないと言い始めた。そして島での生活が長くなるにつれて、少年たちの間には、目に見えない、暗闇への恐怖が広がっていた。

ある夜、少年たちが寝ている間に、一人の落下傘兵の死体が山頂に落ちてきた。遠くの空で空中戦をしていた戦闘機から脱出した兵隊であり、パラシュートで飛んでいる間に息絶えた。次の晩、烽火の番の少年が死体に気づき、この島に住む獣だと報告した。目に見えない暗闇への恐怖は、山頂の獣として少年たちの間の現実となった。獣を確認してから、

少年たちは二つのグループに分かれた。ジャックが集会から抜けて行ったのである。片方はラーフ、ピギーたちのグループ。そして片方はジャックと狩猟隊のグループとなった。ジャックたちは顔に泥を塗り、木の槍を作り、狩猟に出かけていった。ジャックたちは豚を殺した。ジャックは豚の頭を木の棒に刺し、地面に刺した。それは山頂の獣へのお供え物であり、それによって自分たちを襲わないようにと祈った。蠅がたかり、黒くうごめく豚の頭は蠅の王となり、一人の少年に語りかけてきた。

一人の少年が山頂の獣を確認しに行った。暗闇でうごめいていた獣は、パラシュートと風で動いていた死体だった。少年は急いでこのことを知らせに山を下りていった。そのころ他の少年たちはジャックのもとに集まり肉を食べていた。ラーフとピギーでさえ、肉の魅力には逆らえなかった。今や権威がジャックの肩に宿り、ジャックは権力の虜になっていた。嵐の中、ジャックの命令で少年たちは踊り始めた。そこに、獣の正体を知った少年が戻ってきた。暗いジャングルから飛び出してきた少年に向かって、踊っていた少年たちは襲いかかった。獣ヲ殺セ！ソノ喉ヲ切レ！血ヲ流セ！と歌いながら殴りつけ、噛みついた。嵐の海岸は真っ赤に染まり、獣の正体を知った少年は死んだ。

ジャックたちの考えは、段々と宗教めいていった。獣を怒らせないためにもう一度豚の頭を供えることにしたり、ラーフたちを敵と考え崖の上に砦を作りはじめた。さらに、ピギーを襲い、彼の眼鏡を奪っていった。ラーフとピギー、そして数人の少年たちは、ピギーの眼鏡を取り戻し、烽火の重要性を再びジャックたちに分からせるためにジャックの元に向った。砦の上から落とされた岩でピギーは海に落ち、死んだ。ラーフと共にいた少年たちはジャックに捕まり、ラーフは森へと逃げた。

ジャックたちはラーフを捕まえるために島全体を探し始めた。捕まえたラーフの仲間を拷問し、居場所を吐かせた。ラーフは必死に逃げた。ついにジャックたちは煙でラーフをあぶりだそうとした。しかし、その火がジャングルに燃え移り、島は火事になった。今やジャックとその仲間たちは、見た目も心も野蛮人となっていた。逃げるラーフは海岸に、白い制服に身を包む海兵を見つけた。海兵は、燃える島に気付いて捜査に来たのだった。海兵は、ボロボロになった少年と、顔に泥を塗り、槍を持つ小さな野蛮人達を見た。

『蠅の王』における政治体制

『蠅の王』は、疎開中の飛行機が嵐によって無人島に墜落し、少年たちだけで生活することになる。厳密な意味での政治体制は存在しない。しかし、作品の中で、ある程度集団のシステムを見て取ることができる。

まず、前半において楽園として描かれる無人島生活においては、民主主義・エリート主義的な運営がなされている。少年たちは選挙（ごっこ）によって隊長を決定し、隊長の方針に従うこととする。少年たちの年齢はバラバラであり、その点を考慮すれば、現状を認識している年長の少年たちによって運営されているエリート主義と考えることができる。そして、中盤、後半になると、ジャックの率いる集団はジャックの独裁となる⁶⁰。

⁶⁰ ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、pp. 31-32、207-218。

作品の前半、島での様々な決まりごとは集会によって決定された。まず決められたのは、ほら貝を持っている者に発言の権利があり、隊長を除くほかの者は割り込んでの発言をしてはならないということである。そして、近くを通る船に気付かせるために山頂で烽火を上げることが続いて決まった。そのあとには、ジャックをリーダーとする狩猟隊を作ること、夜を過ごすための小屋を建設すること、用をたす場所などが集会で決められた。しかし、小屋の建設への従事などは徹底されず、規則をやぶることに対する罰もなかった。そのため、ほとんどの少年が建設をサボり、好き勝手な場所で用をたした。そして、集会自体も中盤にかけては、たのしいおしゃべりの場となり果ててしまった⁶¹。

『蠅の王』における生活様式

基本的には規定なし。しかし、3つの小屋が建てられ、少年たちは夜になると集まってきてそこで眠る。後半になると、ジャックのグループは崖の上に砦を作り始め、そこを拠点に生活をする。

食事は森に生っている果物や、海で取れるカニや魚などを食べて過ごしている。狩猟隊は作品の中で3度豚を捕まえ、その時には少年たちは肉を食べることができた。

水と食べ物は豊富であり、温暖な気候の島である。楽園（ユートピア）ともいえる環境として描かれている⁶²。

次に、『蠅の王』における特出すべき点について個々に紹介する。

獣

無人島での生活が長くなるにつれて、年少の少年たちは夜になると小屋の外で何か動く音がすると言いだした。実はそれは、年長の少年の一人であるサイモンが、小屋を抜けだし森に行く際の物音だった。しかし、段々と少年たちの暗闇への恐怖の形として、島には獣がいると考えられるようになっていった。

ちょうど時を同じくして、山頂に一人の兵士の死体が落ちてきた。それは空中戦で戦闘機から脱出したのだが、パラシュートで飛んでいる間に息絶えた兵士の死体であり、それが偶然少年たちの無人島の山頂に引っ掛かった。死体は風が吹く度にパラシュートが風を受け、まるでお辞儀でもするかのように動いた。夜の暗闇の中でその光景を見た少年は山頂の獣が自分たちを狙っているとほかの少年たちに伝えた。こうして、山頂の獣は少年たちにとって紛れのないものとなった。

サイモンは唯一、獣の正体に気付く。しかし、そのことを伝えるに少年たちのところに行ったタイミングで殺されてしまう⁶³。

⁶¹ 同上、pp. 49、57、70、76-79、124-126、128。

⁶² 同上、pp. 51-52。

⁶³ ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、pp. 134-144、158-175、200-201、250-251。

蠅の王

蠅の王とは、作品の中盤においてジャックが山頂の獣に対して捧げた豚の頭。豚を殺したジャックは、その場で血を抜き、臓物を抜いた。そして、豚の頭を切り落とし、山頂の獣への贈り物として、両端を尖らせた木の棒で地面にその首を固定した。豚の頭には無数の蠅が群がっていたが、自分にたかっている蠅も、積まれた臓腑も無視し、晒し首になる屈辱も無視して平気な様子で楽しそうに笑っていた⁶⁴。

蠅の王がサイモンに対して、「わたしはおまえたちの一部だよ。おまえたちのずっと奥のほうにいるんだよ。どうして何もかもだめになってしまったのか、どうして今のようになってしまったのか、それはみんなわたしのせいなんだよ」と（心に）語りかける場面が描かれている⁶⁵。

そしてさらに蠅の王には獣へのお供え物という宗教的な意味もあるように感じる。人が権威にすぎる様子を見て取ることができる。

ほら貝

ラーフとピギーが会う最初の場面で、ラーフが海岸の浅瀬で見つける。ピギーがほら貝を吹いて集会を開くことを提案する。ピギーのみがほら貝を持っている人に発言権があるということを最後まで厳守しようとする。ピギーがジャックの仲間の少年によって殺された際、一緒にほら貝もくだけてしまった⁶⁶。

ほら貝は、少年たちの小さな社会の秩序として描かれている。蠅の王が人の心の負の権威をあらわすとすれば、ほら貝は良心と秩序に基づく人の心の正の権威をあらわしているのではないか。

眼鏡

ピギーのかけている眼鏡であり、島において火を得る唯一の道具として描かれている。中盤・後半になり、少年たちのグループがラーフとジャックのグループに分かれると、眼鏡を力づくで奪う場面なども描かれている⁶⁷。

『蠅の王』に描かれる眼鏡は技術の象徴である。無人島において、唯一火を起こせる道具として眼鏡が描かれている。最終的に少年たちが発見されたのも、火のおかげであり、さらに言えば眼鏡のおかげなのである。そういった意味で、やはり『蠅の王』における眼鏡は、技術の象徴として考えることができる。

以上のように、大きく四つの作品を取り上げてその内容と特徴を挙げてきた。次章においては、2章における作品の分析を踏まえて、ディストピア要素を提示する。各作品の要素から、作品を越えたディストピア要素の提示を目指す。

⁶⁴ 同上、p. 225。

⁶⁵ 同上、p. 236。

⁶⁶ ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、p. 300。

⁶⁷ 同上、pp. 274-278。

3章 ディストピア要素

3-1 ディストピア要素の提示

2章において、実際にディストピア作品の分析を進めてきた。分析を通して、各作品における特徴を示した。それぞれの作品に共通する要素はまず、未来に舞台を設定しているという点である。これは、現在の世の中には存在しない状況や技術を用いて社会や体制を描こうとする試みから生じる共通点であると考えられる。さらに、戦争が何らかの形で含まれることも、共通点として挙げるができる。

作品に戦争を描くという共通点は、作品の舞台を設定する上での共通点であると考えられる。我々の生きる世界とは全く異なった世界を描きたい場合、それにも関わらず我々の生きる世界との関係性が必要な場合、作品の舞台を隔絶させる必要がある。このような作業が必要になるのは、例えば未来を想定して描く未来小説などの場合である。そしてこのような必要性が生じた際に、我々の生きる世界の文化・価値観を消滅させる手段として、戦争という共通点が浮かびあがってきたと考えられる。『すばらしい新世界』、『われら』において戦争は過去に起きたものとして書かれている⁶⁸。さらに、同様に戦争を扱う作品として『猿とエッセンス』を挙げるができる⁶⁹。

『1984年』においては、戦争は体制維持のシステムとして、さらなる意味を持たされて描かれている⁷⁰。『蠅の王』においても、戦争が大きな役割を果たしている。一見、『蠅の王』において戦争には触れられていない。しかし、少年たちが無人島で生活することになるきっかけは、第三次世界大戦による疎開のための飛行機が墜落したことなのである⁷¹。我々の生きる世界の文化・価値観から作品の舞台を切り離す役割は無人島が担っているが、無人島へと至るための手段として戦争が描かれているのである。さらに、『蠅の王』においては、作品の特徴として挙げた山頂の獣を描くにあたり、落下傘兵の死体が大きな役割を果たすことになる。上記のような理由から、『蠅の王』においても戦争という共通点を挙げるができる。

しかし、ディストピア作品と言われる作品の中にも、戦争を描いていないものは存在する。作品の舞台を設定する上で用いられている戦争という要素は、今回私が提示したいディストピア要素とは異なった性質の共通点であると私は考える。そのため、今回の4作品分析の、さらに作品の舞台を設定するというレベルでの共通点として、戦争を挙げるに留

⁶⁸ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、p. 58。

ザミャーチン『われら』、川端香男里訳、岩波書店、1992年、1920年、p. 19。

⁶⁹ オルダス・ハックスリー『猿とエッセンス』、中西秀男訳、サンリオSF文庫、1979年、1948年、pp. 54-56、79-80、142。

⁷⁰ 詳しくは性の項で説明する。

⁷¹ ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、pp. 6-7。

める。

結論を示せば、作品の分析を通して私が導き出したディストピア要素は「管理」である。しかし、「管理」という言葉一語を用いてディストピア要素であると完結させることは、あまりに乱暴である。次節からは、「管理」というディストピア要素について、さらに細かく分析を加えてゆく。

3-2 ディストピア要素分析

3-2-1 「管理」について

「管理」という要素をディストピア要素であると結論づけた。私は、作品分析を通して、ディストピア作品の描きだす社会や体制について、大きく三つの点に、特に恐怖を感じた。それは体制を維持する上で合理化が進められてゆく様子、体制の権力を支えているシステム、社会や体制という巨視的な視点から見た性に関する描かれ方という点である。そして私は、これらの点が組み合わさることにより「管理」というディストピア要素が生まれていると考える。

管理という言葉の辞書で調べてみると「ある規準などから外れないよう、全体を統制すること」と書かれている⁷²。そして支配という言葉の辞書で調べてみると「ある地域や組織に勢力・権力を及ぼして、自分の意のままに動かせる状態に置くこと」と書かれている⁷³。ディストピア要素「管理」は、管理・支配の両方のニュアンスを合わせ持っている。ディストピア作品においては、上記のような合理化・権力・性といった要因が組み合わさり、基準から外れないように全体を統制する、地域や組織に勢力・権力を及ぼす、意のままに動かせる状態に置く、などといった様子を見取ることができる。

次項からはそれぞれについて考えていく。

3-2-2 合理化について

まず合理化についてである。合理化という点は、ディストピア作品に描かれる社会や体制を、ディストピアだと感じさせる上で不可欠である。分析の中でも、合理化の果ての、国家の効率的・恒久的な運営を至上命題とする様子を見取することができる。そして、合理化された完全なシステム・組織を一見描いたように見せて、そこに生じる不都合を見せるといった様子も、ディストピア作品には見取れるのである。

『1984年』におけるオセアニアの政治体制を見てみると、国家の全ての機能は4つ

⁷² ヤフー株式会社. 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉). 監修: 松村明.

(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E7%AE%A1%E7%90%86&dtype=0&name=0na&stype=0&pagenum=1&index=04846604033800>). 2010. 1. 9 取得.

⁷³ ヤフー株式会社. 大辞泉 増補・新装版 (デジタル大辞泉). 監修: 松村明.

(<http://dic.yahoo.co.jp/dsearch?enc=UTF-8&p=%E6%94%AF%E9%85%8D&stype=0&dtype=0>). 2010. 1. 9 取得.

の省に集約されており、それぞれの機能は階層的に分化され、運営されている。主人公ウィンストンは真理省の情報局に勤める党外局員であり、細かく階層的に分けられた職位・機能によってオセアニア国は運営されているのである⁷⁴。そして、ディストピア作品においては、私的な生活にまでも、同じように合理化を押し進めた姿が描かれている。

私的な生活における合理化の一つとして、言語の合理化という点を見て取ることができる。それは新語法という、党の進める新しい言語政策である。新語法の目的は、オセアニア国に必要な考え方にだけ表現方法を与えることであり、それ以外の思想を言語の側から不可能にすることである。これは、国家運営を越えて、私的な空間にまで合理化を進める側面とも考えることができる⁷⁵。上記のように、『1984年』においては、合理化の要素を多分に見て取ることができる。そして、『すばらしい新世界』においても、自らの仕事に幸福を覚えるような洗脳が市民になされており、『われら』の単一国のメンバーは時間律法表によって生活している。これらの特徴も同様に、体制の合理化を支える特徴として見て取ることができるのである。

ここで合理化についての理論を見てみれば、マックス・ウェーバーは『官僚制』において、次のように語っている。

官僚制は、純即物的な見地から行政における分業の原則を貫徹するに、もっとも好都合な条件を提供するもので、個々の仕事は、専門的に教育された不断の実地訓練を通していよいよ鍛え上げられる職員に割り当てられて、行われる⁷⁷。

そして「即物的」な処理について、なによりも「人を考慮せず」計算可能な規則にしたがって行われる処理を意味すると説明するのである。マックス・ウェーバーの官僚制の考え方は、より拡大された形でディストピア作品の中に見られるのではないだろうか。

さらに、ウェーバーは、官僚制的支配の徹底的な遂行は身分的「名誉」の平均化を意味し、「階級状態」の普遍的支配を意味すると説明する。そして、組織が「非人間化」されればされるほど、公務の処理にあたって、愛憎やあらゆる純個人的な一般に計算できない一切の非合理的感情的要素を排除することができ、これが官僚制固有の特性であり、称賛さ

⁷⁴ ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、pp. 9、11。

⁷⁵ 同上、p. 68。

⁷⁶ オーウェルは政治の場面において用いられる言葉に批判的であった。それは「婉曲法と論点回避と、もうろうたる曖昧性」が政治の墮落と言葉の墮落に他ならないと考えていたからである。

言語を扱った要素は、オーウェルの他の作品にも見て取ることができる。『動物農場』において、豚たちは自分たちが最初にとり決めた憲法（七戒）を破っていく。豚たちは、自分たちの行動に合うように、七戒自体を書き換えていくのである。『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月、pp. 36-37。

⁷⁷ マックス・ウェーバー『官僚制』、阿閉吉男・脇圭平訳、恒星社厚生閣、1987年、1921 - 1922年、pp. 34-35。

れるものであるとするのである⁷⁸。その上でウェーバーは、近代文化は複雑化され、専門化されればされるほど、それを支える外的機構のために、個人的な同情や好意や恩恵や感謝によって動くかつての旧秩序に代わって、一切の私情を交えず、厳密に「即物的」な専門家をもっとも好ましい組み合わせで供給する官僚制的構造となると結論づける⁷⁹。そしてその結果、官僚制的に編成された支配集団は専制的な地位を占め、被支配者集団の平均化が起こるとするのである⁸⁰。

以上のような点は、ディストピア作品において拡大されて表現されているように思う。そしてそれは、反理想として描かれているのである。

合理化を皮肉として描く後者の様子は、例えば映画『未来世紀ブラジル』に見て取ることができる。『未来世紀ブラジル』においては巨大で精密な社会組織が描かれている。まさに、職位に対して定められた規則、手順にしたがって作業を行うことが徹底された世界が描かれている。しかしその組織は精密で巨大なあまり、実際には各部署から各部署へ書類ばかりがまわされ、責任をなすりつけ合い、家の暖房一つさえ直せないという様子が描かれているのである⁸¹。

効率的・恒久的な組織を描く場面では、人間は部品の一つとして描かれることが多い。マックス・ウェーバーは官僚制の欠点として、官僚制は個性の剥奪につながるという点を挙げている。それは、職員の役割は彼らの権限を定義した文書によって制約され、あらゆる偶発性を考慮に入れたルールや手続きが存在するからであるという⁸²。

合理化、さらにそのために生じる制約、これらの点は「管理」をディストピア要素と考えた時、要素を構成する一要因であると考えられるのである。

3-2-3 権力について

『1984年』では党による権力への姿勢が明示されている。『蠅の王』においても無垢なる状態から権力が生まれてゆく様子が描かれている。チャップマンの『ロボット』において描かれるロボットは、いわば簡易人間であり、ロボットの反乱が起こるのは、なぜ支配されるのか、といった権力論の話へと通じる。映画『時計仕掛けのオレンジ』では、国家や組織といった巨視的な視点は捨てられ、恒久的・安定的となった国家における少年たちの暴力への傾向を描いてみせている⁸³。社会や体制の権力構造を描く様子は、多くの作品に見て取ることができる。ディストピア要素を考える上で、権力は一つの側面であると考

⁷⁸ マックス・ウェーバー『官僚制』、阿閉吉男・脇圭平訳、恒星社厚生閣、1987年、1921-1922年、p. 35。

⁷⁹ 同上、pp. 35-36。

⁸⁰ 同上、p. 50。

⁸¹ 『未来世紀ブラジル』、テリー・ギリアム監督、20世紀フォックス、1985年。

⁸² 株式会社ダイヤモンド社。ダイヤモンド社ビジネス情報サイト。世界のビジネスプロフェッショナル 思想家編。(http://diamond.jp/series/bizthinker/10026/)。2010. 1. 4取得。

⁸³ 『時計仕掛けのオレンジ』スタンリー・キューブリック監督、ワーナー・ブラザーズ、1971年。

えられる。

『1984年』においては、過去が党の都合のいいように常に改変されている。同様に、単一の価値観を植え付けるため、過去を抹消するという演出は様々な作品に見て取ることができる。レイ・ブラッドベリによって書かれた『華氏451度』（1953）では、書物の閲覧・所持が禁止され、人々は常に強い刺激と短絡的な快感を求めるように仕向けられている。『華氏451度』において、主人公は違法に所持されている書物を燃やす公的職業、焚書官（ファイアマン）という仕事に従事しており、過去の書物を燃やす意味の一つが、過去の抹消なのである⁸⁴。さらに、『すばらしい新世界』においても過去の歴史を葬り去る場面を見て取ることができる。特徴にも挙げたように、『すばらしい新世界』の世界においては、博物館は閉鎖され、歴史的記念物は爆破され、あらゆる過去の書物は弾圧されたのである⁸⁵。『1984年』、『すばらしい新世界』、さらに『華氏451度』において見られる、過去を変える、抹消するという特徴は、合理化・権力につながる、体制の維持を目的とした行為である。

さらに『1984年』においての特徴、二重思考もまた権力を考える上で特筆する必要がある。二重思考は過去の改変を可能にするための一つの道具であるといえる。真実を認識しながら、党の提示する虚構を受け入れるシステムとして描かれている。これは、どこに権力が属しているのかという点を考えさせる。誰がオセアニアという国家のシステムを守ろうとしているのか。本当に市民は嫌々党の体制に従っているのか。このような問題をオーウェルの示した二重思考という発想から考えることができる。

ここで、杉田敦『権力』を見てみると、主体化権力についての記述がある。杉田は、主体形成権力の説明において、国民化権力の成立について考えた時、多数の人間が共存しているという条件の下で、人間の「群れ」を管理するテクノロジーが利用されたという論点が導入されなければならないのではないかとしている。多くの人間が共存していくためには、一定の行動パターンを共有していることが必要であるとするのである。そして主体化権力とは、必ずしもある特定の個人や集団の意図に還元できるものではないし、権力を及ぼされている側も、一方的に権力を行使されている訳ではなく、権力は人に力を与える面と人から権力を奪う面との二面性を持っているとするのである⁸⁶。

さらに『権力』においては、「われわれ」の空間をつくって安定しようとする考え方を問題にしなければならないとし、どのような権力空間も「最終的な解決」ではないとしているのである⁸⁸。

⁸⁴ レイ・ブラッドベリ『華氏451度』、宇野利泰訳、ハヤカワ文庫、1975年、1953年、pp. 18、60、94-100、102-103。

⁸⁵ オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1932年、pp. 62-63。

⁸⁶ 杉田敦『権力』、岩波書店、2000年、p. 12。

⁸⁷ しかし、主体間権力論には問題点もあると杉田は指摘する。それは、ある主体が確固とした意図を有するという想定が説得的かどうかという点である。どのようにしてもそれぞれの主体の動機付けを確定することはできないとし、明確な意図をもつ主体を想定することには非現実性が伴うとしている。杉田敦『権力』、岩波書店、2000年、pp. 13-15。

⁸⁸ 杉田敦『権力』、岩波書店、2000年、p. 79。

『権力』における以上の議論は、ディストピア作品に描かれる社会や体制においては、合理化の項で挙げた官僚制同様に拡大された形で描かれているように感じる。ディストピア作品に描かれる社会や体制においては、権力論へと通じる様子を見て取ることができる。そして、権力に関する問題には正解がないということも、ディストピア作品において多様な権力空間が描かれる一つの理由なのではないかと考えることができる。

他にも、『蠅の王』では反理想社会へと至ってしまう人間像というものを、純粹で無垢な子どもを通して描いてみせた。子どもたちにはもともと政治的な思惑もなければ敵対的な意識もない。しかしそんな子どもたちの間にさえも権力が発生し、支配の関係が生まれてゆく。作品の最後の場面において、主人公ラーフは無垢が失われたこと悲しみ、人間の心の闇を悲しみ、泣くのである⁸⁹。

さらに、『蠅の王』において、少年たちは暗闇への恐怖から自分たちで山頂の獣という幻を生み出してしまう。同様の様子は、前述のハックスリーの作品『猿とエッセンス』にも見ることができる。『猿とエッセンス』においては、世界戦争が起きてしまったのはベリアル（悪魔）のせいであると生き残った人々は考えるのである。そして、生き残った人々の社会において「ベリアル様」として信仰する様子が描かれている⁹⁰。これらの特徴からは、より宗教的な権威についても考えることができる。

以上のように、権力へと通じる多くの特徴を作品から見て取ることができる。

3-2-4 性について

次に性についてである。社会や体制といった巨視的な視点から語られる性について、多くのディストピア作品にその様子を見て取ることができる。全体の統制、意のままに社会、組織を動かすというディストピア要素「管理」を想定した時、性に関して描かれる様々な制約は、恐怖が感じられる点であり、要素を構成する一要因であると考えられる。

合理化にもつながってくることだが、合理化の果てに想定される恒久的・安定的なシステムにとって、性差から生じる性欲や肉体的魅力などを、それ自体が野蛮であり、不安定要素だと位置づける作品は多い。

『1984年』においては、党は性本能を抹殺しようと試みていると記述されている。党は、統制の及ばない忠誠関係が男女間に樹立されるのを防止し、性行為からあらゆる快楽を取り除くことを目的としているとしているのである⁹¹。男女間の性的な関係は、党の支配に対する脅威として描かれている。

さらに、『1984年』における性の統制には、更なる役割が与えられている。それは、封じ込めた性的欲求を戦争熱へと転化するということである。性的な欲求を抑え込むこと

⁸⁹ ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、1954年、pp. 335-336。

⁹⁰ オルダス・ハックスリー『猿とエッセンス』、中西秀男訳、サンリオSF文庫、1979年、1948年、pp. 132-144。

⁹¹ ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949年、pp. 84-85。

によって、その欲求不満を戦争への熱狂的な支持や相手国への憎悪といったエネルギーに転化させるのである。性欲を否定するだけでなく、そのエネルギーを体制維持のエネルギーの元としている点で『1984年』は独特である。

『1984年』と同様に『猿とエッセンス』においても、性交渉が禁止される様子が描かれている⁹²。しかし、性に対して抑圧や禁止を描く作品ばかりではない。

『1984年』において厳しく性的な欲求が否定されているのに対して、『すばらしい新世界』においては性的な欲求は意識するまでもなく満たされる欲求として描かれている。性欲は好きな時に好きなだけ満たされる欲求なのである。『すばらしい新世界』において性交渉は楽しい遊戯の一つという位置づけであり、さらに『われら』においても同様に性が解放されている様子が描かれている。『われら』においては行政的な手続きを経ることによって、誰でも、誰とでも、性交渉を行うことができる。性は、管理され、調和的で快い有益な機能となっていると記述されている⁹³。そしてそこでは性の持つ私密的な側面は抹消されているのである。

ディストピア作品において、生殖と性欲の分離、計画的な人口の調整、予測不可能な性欲の排除、といった要素を見て取ることでできる作品は多い。例えば、計画的に性を扱う作品として『機械が止まる』を挙げることができる。機械によって快適な個室を与えられるこの世界では、個室の数に合わせて人間は誕生する（させられる）。父や母となる人物も機械によって選出されるのである⁹⁴。

興味深いのは、『すばらしい新世界』の著者であるハックスリーによって書かれた『猿とエッセンス』においては、性が禁止の描写で描かれているということである。『猿とエッセンス』において、世界は核戦争によって壊滅的な状態に陥っており、舞台となる国家は宗教的な権威を土台として成立している。司教と教会が絶対的な権力を持ち、人々を支配している様子が描かれている。そこでは、性交渉は一年に一回のお祭りの期間のみに許される行為であり、特定の相手とではなく、市民すべてが入り乱れて行われるのである。その期間以外に性交渉をもったものは罰せられ、性の統制という要素を見て取ることができる⁹⁵。その描写は『1984年』に近いものがあるといえる。同一著者による真逆ともいえる性の描写からは、ディストピア作品に共通していえることが、性によって生まれる不確定な要素を排除するということであり、禁止（『1984年』や『猿とエッセンス』）と解放（『われら』や『すばらしい新世界』）は結局、「管理」を妨害する可能性のある不確定な要素の排除という同一の目的につながってくると考えることができるのである。

さらに、シオドア・スタージョンによって書かれた『ヴィーナプラスX』（1960年）では、両性具有となった新人類の様子が描かれており、禁止・解放を越えて、性自体を一

⁹² オルダス・ハックスリー『猿とエッセンス』、中西秀男訳、サンリオSF文庫、1948年、1979年、pp. 103-106。

⁹³ ザミャーチン『われら』、川端香男里訳、岩波書店、1992年、1920年、pp. 34-35。

⁹⁴ E・M・フォスター『E・M・フォスター著作集5、天国行きの馬車、短篇集I』、小池滋訳、みすず書房、1996年、1909年、pp. 179-180、187。

⁹⁵ オルダス・ハックスリー『猿とエッセンス』、中西秀男訳、サンリオSF文庫、1979年、1948年、pp. 146-151。

つのテーマとして扱った作品も存在する。両性具有となり、男性も女性もなくなった世界では人々はおだやかでやさしい。しかし、そこに迷い込んでしまった男性の主人公は、その世界で、好きだった女性への堪えようのない感情に襲われるのである⁹⁶。この作品では、逆説的に、性的な部分（性差）からくる、本能的とも言える感情の奥深さを描いているのである。

性はディストピア作品の大きなテーマであり、またユートピア思想史を通して、性的な欲求は不確定な要素として認識されてきた。ディストピアにおいても同様の認識において性が扱われている。性から生じる本能的な部分を封じ込めようとする。その点に恐怖や脅威を感じるのである。

以上の分析をもって、私はディストピア要素「管理」を、ディストピア要素であると考ええる。

⁹⁶ シオドア・スタージョン『ヴィーナス・プラスX』、大久保譲訳、株式会社国書刊行会、2005年、1960年、pp. 290-292。

おわりに

本論文を通して、ディストピア要素の提示を目指してきた。私はディストピア要素を「管理」であるとし、さらに合理化、権力、性という作品に共通して見られる点に分析を加えてきた。

私は現在という観点からディストピア作品を用いて、作品に描かれる社会や体制をディストピアであると感じさせる要素の分析を行ってきた。私が想定する現在とは、読み手の置かれた時代・状況であり、要素を考える際の時代・状況である。

作品が意図して描きだそうとした脅威の対象というものが確かにある。しかし、小説や映画などの媒体によって、時代を越えて残された以上、読み手の置かれた時代・状況で読まれることは避けられないのである。

多くのディストピア作品が、実際に誕生する（した）共産主義に対する脅威・恐怖から生まれた。しかし、実際にその壮大な試みが失敗に終わり、脅威・恐怖に値しない存在になった後も、ディストピアであると感じさせる作品は増え続けている。ディストピアとは、反理想という意味であり、反理想の基準とは反理想を考えるその時なのである。

例えば、当時理想社会として描かれた『ユートピア』は、もはや、理想の社会とは言えない。しかし、当時の状況から見た理想郷は『ユートピア』だったのである。

同様の事はディストピア作品についても言える。『われら』、『1984年』は、共産主義社会を意識して製作された。しかし、反共産をもってしてディストピアであるとする訳にはいかないのである。ソ連が崩壊し、共産主義の脅威がなくなったと言っても過言ではない現代においても、『われら』、『1984年』は反理想的に感じられるのである。だからこそ、現在という視点から作品に描かれる社会や体制をディストピアであると感じさせる要素を考える必要がある。

以上のような考えを元にディストピアについて考えれば、ディストピアとは、現存秩序に対する闘いであり、現存秩序に対する闘いとは、時代や状況に依存するものであると考えることができるのである。

読み手の置かれる時代・状況が変わった時に、今回提示した要素がディストピア要素であるとは限らない。仮に、性が制度化される時代・状況が来るとすれば、少なくとも私の提示した性に関する項は、ディストピア要素の一角とは言えなくなるであろうし、分析を加えてきた作品における性に対する描写にも、ディストピアだとは感じなくなる可能性がある。

読む時代によって、読み手は作品の中に新たなディストピアを生みだし続ける。『1984年』から、迫りくる共産主義の恐怖を読み取る人はもはやいない。かわりに、未知の管理社会、監視社会への恐怖を『1984年』から読み取るのである。

時代によってディストピアは変わり続け、ディストピアを描く作品は生まれ続ける。皮肉な話ではあるが、ユートピアの語源でもある『ユートピア』は、私の考え方から言えば、今やディストピア要素を持った作品なのである。

組織の合理化における議論、権力における議論、性の捉え方に関する議論、これらに正解（真理）というものは未だ見出されていない。答えがないから、そこには理想を見出すことも、恐怖や脅威を見出すこともできる。今回の分析を通して私は、ある一つの固定したディストピア像というものを見出すことはなかった。

『ユートピア』の時代、そしてその後の時代においては、固定したユートピア像として、共産主義社会を想定することができた。そして、共産主義社会が現実のものとなった時、今度は固定したディストピア像として共産主義社会が想定されたのである。

現在から見れば、共産主義社会はすでに過ぎ去った脅威であり、ユートピア像ともディストピア像とも考えられない。そして、共産主義社会という同一の社会を題材にしている過去のユートピア作品、ディストピア作品の両者に、共通点を見出すこととなるのである。

過去のユートピア作品、ディストピア作品に現在共通の要素を見出すことができるのは、時代によってユートピア像、ディストピア像が変わり、過去に共産主義社会という共通の対象を両概念が対象としたからであった。

現在を考えた時、我々の時代にはある一つの固定したユートピア像、ディストピア像を想定することは困難である。今回提示した要素からは、ある一つの固定したユートピア像、ディストピア像を想定することが困難であるということから、一つの時代内において正解（真理）の見出されていない要素に、ユートピア、ディストピアの両概念が接近してゆく可能性があるということも考えることができる。

ユートピアは現存秩序との闘いを通して現れた。ディストピアも同じである。ユートピアの対極として一般的に認識がなされているディストピアであるが、ユートピアと同様に、現存秩序に対する闘いとしてディストピアを認識することができ、ディストピア作品を読み解くことができる。そしてだからこそ、常にディストピア概念の要素は変わり、その要素を考える必要があるのではないかと考える。

参考文献一覧

書籍

E・M・フォスター『E・M・フォスター著作集5、天国行きの馬車、短篇集I』、小池滋
訳、みすず書房、1996年、1909年。

ウィリアム・ゴールディングス『蠅の王』、平井正穂訳、集英社文庫、1978年、195
4年。

上野千鶴子『発情装置』、筑摩書房、1998年。

オルダス・ハックスリー『すばらしい新世界』、松村達雄訳、講談社文庫、1974年、1
932年。

オルダス・ハックスリー『猿とエッセンス』、中西秀男訳、サンリオSF文庫、1979年、
1948年。

川端香男里『ユートピアの幻想』、講談社学術文庫、1993年。

ザミャーチン『われら』、川端香男里訳、岩波書店、1992年、1920年。

シオドア・スタージョン『ヴィーナス・プラスX』、大久保譲訳、国書刊行会、2005年、
1960年。

ジョージ・オーウェル『1984年』、新庄哲夫訳、ハヤカワ文庫、1972年、1949
年。

杉田敦『権力』、岩波書店、2000年。

トマス・モア『ユートピア』、平井正穂訳、岩波文庫、1957年、1516年。

マックス・ウェーバー『官僚制』、阿閉吉男・脇圭平訳、恒星社厚生閣、1987年、19
21 - 1922年。

的場明弘『ネオ共産主義論』、光文社、2006年。

マンハイム『イデオロギーとユートピア』、鈴木二郎訳、未来社、1968年、1929
年。

レイ・ブラットベリ『華氏451度』、宇野利泰訳、ハヤカワ文庫、1975年、1953
年。

雑誌

『世界の文学72号』、朝日新聞出版、2000年11月。

映画

『未来世紀ブラジル』、テリー・ギリアム監督、20世紀フォックス、1985年。

『時計じかけのオレンジ』スタンリー・キューブリック監督、ワーナー・ブラザーズ、1
971年。